

福島県立医科大学 学術機関リポジトリ



Title	5. 闘病中の子どもや家族が訪れる医療ケア付キャンプ場について 小児がんの子どもが参加するキャンプにボランティア参加した立場から (一般講演, 第19回福島小児血液・腫瘍研究会)
Author(s)	安齋, 紀
Citation	福島医学雑誌. 74(1): 27-27
Issue Date	2024
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/2275
Rights	© 2024 福島医学会
DOI	
Text Version	publisher

This document is downloaded at: 2024-06-26T19:28:58Z

4. 移植予定患者へのオリエンテーション動画作成の取り組み

福島県立医科大学附属病院 みらい棟5階病棟
東フロア

石野 将文, 湯沢 茉央, 村松亜矢子
木村麻利子, 本田 綾子, 蓮沼千賀子
高野由利江

【目的】ハプロ移植に向けたオリエンテーション(以下オリ)は複雑で内容は多岐に渡る。オリの動画化という他施設での取り組みを当病棟でも行うことで、看護師の経験に関わらない質の均一化とオリの準備と説明による看護師の負担軽減が可能か検討を行った。【方法】オリ経験がある看護師に対しアンケートを実施した。【結果】回答者全体の70%がオリに自信がないと回答し、全員がオリに負担を感じていた。また説明や準備に平均5.5時間かかっており、それらを時間外にサービス残業等で行っている看護師もいた。また回答者全員がオリの動画化は負担軽減に繋がると回答した。【考察・結論】アンケート結果から当病棟でもオリの動画化は目的達成のために一定の効果があると判断し動画化を進める事とした。動画完成後も患者の個別性に応じてオリの内容は適宜変化させる必要はあるが、動画をベースに質が高く効率の良いオリが実施できるよう内容の検討を進めていく。

5. 闘病中の子どもや家族が訪れる医療ケア付キャンプ場について～小児がんの子どもが参加するキャンプにボランティア参加した立場から～

福島県立医科大学附属病院 患者サポートセンター

安斎 紀

「そらぶちキッズキャンプ」は北海道にある医療ケア付きキャンプ場である。キャンプの種類はこどものみのキッズキャンプ、家族単位のファミリーキャンプ、個別家族と主治医同行のレスパイトキャンプ、家族会や団体のグループキャンプがある。年

間を通してキャンプが行われており、それぞれのキャンプごとに特徴が異なる。キャンプ場の特徴は、キャンプ前の事前説明会の開催、子どもたちのニーズに合わせたアクティビティ、研修を受けたボランティアの参加、北海道の旬の食材を使った食事、日常の医療ケアが継続できるサポート、バリアフリー・ユニバーサルデザインの視点で設計された施設である。私は主に調理班としてボランティア参加しているが、様々な背景のボランティアとの交流や、子どもたちの笑顔とキラキラした瞳に癒される。医療現場以外での学びが大きく、子どもと家族もここでの貴重な体験がかけがえのない思い出となり、明日からの原動力になる

<特別講演>

核医学治療の小児疾患への展開と多職種連携

福島県立医科大学附属病院核医学科・先端臨床
研究センター 教授

織内 昇

核医学治療は、新薬が承認されるとともに企業治療も行われ、発展が見込まれている。本学では小児腫瘍内科が中心となり、神経芽腫の中樞神経系/軟膜髄膜転移に対する ^{131}I -omburtamabを用いた脳室内放射免疫療法の国際共同試験を国内で唯一実施するとともに、自前で製造する ^{211}At -MABGによる褐色細胞腫の医師主導治験が開始された。 ^{211}At が放出する α 線は、飛程が短く影響が体内に留まるため、飛程の長い γ 線も放出する ^{131}I などと異なり外来治療が可能である。神経芽腫に応用可能な ^{211}At -MABGは、被ばくの点でも小児への使用に好適である。前述の ^{131}I -omburtamabの試験では、安心して患児の治療やケアに従事できるよう、医療従事者や家族の被ばく低減のための実施手順や安全管理基準を独自に整備した。医師、看護師、治験コーディネーター、診療放射線技師などが連携した治療実施体制と、適時の情報共有・振り返りを実践できたことは、今後の核医学治療の展開に大きな意義がある。